

椎の木

豊島与志雄

青空文庫

がけの上のひろい庭に、大きな椎しいの木がありました。何百年たつたかわからない、古い大きな木でした。根かぶが張りひろがり、幹がまつすぐにつき立ち、頂の方は、古枝が枯れ落ちて、新たな小枝がこんもりと茂っていました。朝日がさすと、若葉がさわさわと波だち、むくどり椋鳥や雀がなきたてました。

春さきのこと、あたたかいそよ風が吹いて、この椎の木も笑つてるようでした。

その根もとに、二匹の鼠がかけまわっていました。小さいのが、根のはりだしたかげにかくれていますと、大きいのが、とびついてきます。とたんに、小さいのは逃げだして、根かぶの向うがわ

にまわります。大きいのは追っかけてゆきます。小さいのはまた逃げだします。そして、根のまわりをぐるぐるまわったり、立ちどまって相手のようすをうかがったり、逆にまわったりします。

そのうちに、こんどは大きいのが逃げ、小さいのが追っかけます。

鬼ごっこをして遊んでるのでした。

ところが、大きいのが、何かのけはいを感じて、じっと立ちどまりました。小さいのがとびついてきても、身動きもせず、ふりむきもせず、あちらを見つめています。首をすこしかしげ、耳をたて、長い尾をぴんと伸ばしています。

——なんだか、あやしいぞ。どうもそうらしい。あ、そうだ。

これはいけない。

大きい鼠は一声たてて、逃げだしました。小さい鼠もそれに近づきました。

そして二匹の鼠は、いつさんに、がけの下へかけおりて姿をかくしてしまいました。

そこへのつそりと、一匹の三毛猫がやって来ました。椎の木の根のあたりをうそうそとかぎまわりました。

——これはおかしいぞ、こんなところに、鼠がいるわけはないが、どうも鼠くさい。おれが退屈してるように、鼠も退屈して、こんなところへ出て来たのかな。それにしても、俺が来たからつて、逃げなくてもいいんだがなあ。俺はちよつとふざけてみせる

だけで、鼠なんか食やしない。猫はそのあたりをかぎまわって、それから、落葉の上にねそべりました。

——鼠でてこい、鼠でてこい。いつしよに遊ぼうよ。

そんなことをぼんやり考えながら、猫は眼をほそめて、うつとりと眠りかけました。春の日があたたかくさして、落葉の上はよい心地でした。

やがて、遠い人声に猫はすこし眼を開きました。

青い大空に、なにか一筋、ほそいものがかかっています。たいへん高いようでもあれば、すぐ低いようでもありました。

猫ははつきり眼を開きました。

見ると、一筋の糸が、椎の木の上へのびていました。糸の先に

は、赤い絵のかいてあるたこ凧が、ふらりふらりとたぐりよせられて
いました。

椋鳥がとんでにげました。

凧はだんだん近くなりました。右にかたむき、左にかたむき、
あぶなつかしいようすでしたが、にわかにな、がくりとかたむいて、
さかさまになりました。糸が椎の木の枝にひっかかったのです。
そしてそのままたぐりよせられたので、凧までも枝にひっかかっ
てしまいました。

——ばかなことだ。とうとうひっかかってしまった。猫は立ち
あがって、背のびをしましたが、またそこにねそべって、眼をつ
ぶりました。

一郎と二郎が、風の糸をまきとりながら、椎の木の下にやって来ました。

一郎は上を見あげながら、風の糸を、ちよつちよつと引っぱり、ゆつくり引っぱり、強く引っぱりつづけてみました。そのたびに、椎の葉と風がゆれ動くだけで、風はそこからはなれませんでした。

「だめなの。」と二郎は尋ねました。

「うん。」と一郎は答えました。

「さおをもつてこようか。」

「届きやしないよ。」

「はしごをもつてこようか。」

「あんなとこまで、登れやしないよ。」

「石を投げつけてみたら……。」

「ばか、破けるばかりじゃないか。」

それで、二郎はもう手段がつかしました。うらめしそうに尻をあおぎ見ました。

「兄さんがいけないんだよ。僕がもうやめようというのに、糸をすつかりくりだしてしまっただもの。」

「風がなくなつたのがいけないんだ。きゆうになくなつたんだから……。」

「風がきゆうになくなるの。」

「なくなるよ。きゆうに吹いてくることがあるだろう。だから、きゆうになくなることだつてあるさ。」

「でも、ゆつくり吹いてくることもあるよ。」

「うん。ゆつくり吹いてきて、ゆつくりなくなることもあるさ。」

一郎はまた風の糸をいろいろな引っぱってみました。だめでした。

「お前やってごらんよ。」

二郎は糸を受け取って、いろいろに引っぱってみました。

一郎はあたりを見まわして、三毛猫を見つけました。

「おや、ミミーがこんなところにねてるよ。」

一郎は猫を抱いてきました。そして、椎の木に引っかかっている風を見せました。

「ミミー、この木に登って、あの風を取って来いよ。いいか、取

つて来たたら、うまいものをあげるよ。取つて来いよミミー。いいか、ミミー。」

一郎は猫を椎の木にだきつかせました。猫はそこに爪をたててちよつと止まりましたが、身をねじりながら、ぱつと地面にとびおりました。

一郎は笑いました。

「ミミーもだめだつていうよ。あきらめようよ。」
二郎は考えこみました。それから、きゆうに眼をかがやかせました。

「そうだ、植木屋にたのもう。近いうちに植木屋が来るつて、お母さまが言つていらしたよ。植木屋なら、あすこまで登れるよ。」

「ほんとに来るのかい。」

「ほんとだよ。お母さまに聞いてごらんよ。」

「そんなら、凧をつないでおこう。」

糸を切つて、そのはじを、つつじの木にゆわえつけました。

そして、二郎は糸巻をもち、一郎は猫をだいて、あちらへ行き
ました。

椎の上枝のへんは、にわかには、そうぞうしくなりました。そこ
に住んでる多くの椋鳥が、凧のことでしばらく静まりかえったあ
と、いつそうにぎやかに飛びかい、なきたてました。

そこへ、一羽の鳥がとんできて、上枝にとまりました。椋鳥た

ちはちよつと黙りました。

鳥は用心ぶかくあたりを見まわしました。それから、じつと凧を眺めました。凧にかいてある赤いひげだるまの絵を、うさんくさそうに眺めました。

その近くに、一羽の椋鳥がとびだしてゆきました。

——いやな奴が、またやって来たな。

だが鳥は、じつとしていました。

椋鳥は眼をぱちつかせて、鳥を見ました。

——おかしいな。こいつは、いつもいやな声で、カアカア鳴きたてるくせに、今日はどうして黙ってるのかしら。

鳥は椋鳥に眼もくれないで、地面をあちこち眺め、それからま

た、凧を見ながら、しきりに首をかしげています。

——ははあ、凧をこわがってるんだな。

そう思つて、椋鳥はあざ笑いたくなりました。

——こいつは、ほんとにまやかし者だ。たいへん威勢がよさそうで、じつはひどくおくびようだ。たいへん大胆なようで、じつはひどく用心ぶかい。どこかまぬけのようで、じつはわるがしい。ほんとにまやかし者だ。鳥はまだ、鳴きもせず、まばたきもせず、凧を眺めていました。

——凧がそんなにこわいのかな。それとも、なにかたくらんでるのかな。

椋鳥は凧のそばにとびうつりました。

鳥は、椋鳥ではなく、やはり凧を眺め、地面をあちこち眺め、また凧を眺めました。

椋鳥はもう、なんだかまんしかねました。くちばしで凧をついてみせました。かさかさと音がしました。それでも、鳥はまだじつと凧を眺めていました。

椋鳥はまた凧をつきました。それから、凧の上、赤いひげだるまの顔のあたりに、とび乗って、足でひっかいてやりました。ばさつと音がし、ぱりつと破けて、凧はぐらりとかたむきました。鳥は大きな翼をひろげて、凧のように飛んでいってしまいました。

椋鳥はなかばひろげた翼をひらいて、飛びあがろうとしました。

ところが、片足が風の紐ひもにひっかかっていた。風の四隅よすみや中程についてる紐が一つにまとめられてあるその真中に、足をふみこんだのです。

椋鳥はあわてました。片足にからんでる紐を、ほかの片足でけおとそうとして、そちらにも紐をからませ、両足をすり合せばたつかせて、ますます紐をからませました。と共に、飛びあがろうとして力いっぱい羽ばたきをしました。

風はゆれ動いて、枝からはなれました。枝にかかっている風糸が、一方は地面のつつじの木につながれたまま、ぴんと張りきり、ついに切れました。

椋鳥は一生けんめいに羽ばたきました。しかし、足に風をつ

けたまま飛ぶほどの力はありません。凧といっしょにふらりふらりと地面へ落ちてゆきました。

椋鳥はもう羽ばたきをやめました。横ながれにばさりと地面へ落ちました。

そしてしばらく、椋鳥はけわしい息をつきました。

声や音がしました。一郎と二郎が、あちらから走ってきます。

三毛猫もいっしょにかけてきます。

椋鳥は立ちなおりました。生命のあやういことがかえって気をおちつかせました。翼をおさめ、片足を静にもちあげました。足は凧紐からぬけました。ほかの片足をもちあげると、それもするりとぬけました。

一郎と二郎と猫は、すぐ近くまでせまってきました。

椋鳥は横手ななめに眼をすえて、ぱつと飛びたちました。飛びあがってしまえば、羽ばたきに力がこもって、ぐんぐん速くなりました。

がけの外にいで、大きく半円をえがいて、若葉のでだしてる椎の木にとまりました。

破れてる凧の上に、三毛猫はとびつきました。

「ミミー、ミミー、おどきよ。」と一郎は叫びました。

二郎は凧をとりあげました。あちこち破れ、ことに、赤いひげだるまがひどく破れてるのを、じつと、眺めて、泣きだしそうな顔をしました。

一郎は凧の破れ目をしらべました。

「あの椋鳥が破いたんだ。ほかのとけんかして、凧にひっかかったのかもしれないよ。」

そのあたりに、椋鳥の小さな羽毛が落ち散っていました。猫はそれをかぎはじめました。

——おかしなことだ。さつきは鼠のおいがしていたし、こんどは小鳥のおいがしている。こんなところに小鳥のおいがするとは、どうもへんだぞ。

猫はかぎまわって、がけの方まで行き、遠く見わたしました。日の光と人家ばかりで、なんの変ったものもありませんでした。

一郎は猫のあとを見やりながら、二郎に言っていました。

「凧にだるまの絵なんかかいてもらうからいけないんだよ。僕が張りかえてやるから、こんどは竜の絵をかいてもらえよ。」

「だって、竜の絵は、黒い雲ばかりで、まっ黒だよ。つまんないや。」

「赤いんだってあるさ。真赤な雲の中に、真赤な竜がおどってるのは、すてきだよ。」

「そんなの、太田先生がかいて下さるかしら。」

「僕がたのんでやるよ。」

「でも、このひげだるまも、とてもよかつたよ。」

「そんなに好きなら、ちゃんとした紙にかいてもらおう。僕がたのんでやるよ。」

「うん。」

二郎は泣きそうな顔をやめて、にっこり笑いました。

「だが、おかしいなあ。木の上の凧を、椋鳥が取ってくれるなんて……。」

一郎はつぶやきながら、猫を呼びました。

「ミミー、ミミー……。」

猫は立ちどまって、一郎の方を眺めました。

——小鳥のことかもしれないぞ。

猫はかけて来ました。

一郎は猫をだきとりました。そして二郎といっしょに、あちらへ行ききました。

椎の木の上には、多くの椋鳥がさわいでいました。

それらの椋鳥のなかに、さっきのいたずら者の椋鳥も、もうたち戻っていました。

彼は羽毛をすこしいためていました。それを、くちばしでなでつけて、身づくろいをしました。いまいましくもあれば、またとくいでもありました。

——あの鳥のせいだ。こんどやってきたら、つつついてやろう。だが、危いところだった。俺もすこしあわてたかな。それにしても、ふしぎだなあ。ふだんとまりなれた木の上で、凧にひっかかり、とまりなれない地面の上で、凧からぬけだしたんだからな。

これには、なにか、俺の思い及ばないことがあるそうだ。まあゆつくり考えてみよう。こんなことは生れてはじめてだ。いや、誰にもはじめてだ。俺一人が知ってることだ。

椋鳥は身づくろいをすまして、一声たかく叫びました。そして、椎の木のいちばん高い枝にとびうつりました。そこから、四方を眺めました。

風はやみ、うらかな春の日で、遠くはぼーとかすんでいました。近くの低い木の茂みに、雀の声がかすかにしていました。椋鳥は二三度鳴きたてました。それがあいずでした。そして飛びたちますと、ほかの椋鳥もついてきました。一群れになって、中空をさーっと飛んで、近くの木立へ遊びに行きました。

この一群れが飛びたつ羽風に、椎の古葉がいくつも散って、はらはらとまい落ちました。

そこへ、また三毛猫が出てきました。ちよつと椎の木を見あげたきり、のっそりと歩きつづけました。鼠のことも小鳥のことももう忘れてしまつてゐるらしいようすで、鼻も耳も動かさず、平気な顔つきをしています。

ところが、ふいに、猫は立ちどまりました。つつじの木にゆわえられた尻糸が、切れて地面に横たわつてゐる、その糸のそばに、こがね虫が一匹はいだしていました。

猫はこがね虫をじつと眺めました。それから、右手をそつと差し出して、虫の背にさわるかさわらないかぐらゐに、ちよつかい

をだしました、こがね虫は、すぐ、そこにすくんで、頭も足もちぢこめてしまいました。

猫はまた右手を差し出して、こんどはほんとに、虫の背にさわってみました。虫は身体ぢゆうをちぢこめて、身動きもしませんでした。いつまでも動きませんでした。

猫はまた右手を出しかけて、やめました。

——おかしな奴だな。生きてるのか死んでるのか、さっぱりわからん。

猫は虫をかいでもみないで、椎の木の根もとの方へ行きました。だいぶしばらくして、こがね虫はしずかに頭をもたげ、足をのばしました。そしてはいだしました。

風糸が地面にのびてるそのわきを、すれすれに、こがね虫ははつてゆきました。先の方になると、糸は椎の木から落ちて不規則にこんぐらかっています。そこまでたどってゆくと、こがね虫は立ちどまりました。立ちどまって、みじかいしよっかくだけを動かして、しばらく考えました。

——はてな、どうしたものかなあ。どちらへ行くのでしょうか。こがね虫は迷ったあげく、羽をひろげて、飛びあがりました。ぶーんと羽音をさして、まっすぐに飛んでゆきました。そしてすぐ、その姿は見えなくなりました。

こがね虫のかわりに、椎の古葉が一枚、ひらひらとまい落ちてきました。その古葉が落ちたあたりに、ほかの落葉の上に、三毛

猫はもうまるくなつて眠っていました。そこはあたたかく日が
つていました。

椋鳥の群れはまだ戻つてきませんし、あたりはおだやかで静か
でした。猫は時折、うつすらと細眼をあけて、でも何も見ずに、
またすぐ眼をふさいで眠りました。

大きな椎の木も、日の光のなかに静まりかえつて、うつとりと
眠りかけてるようでした。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系 第一六卷」ほるぷ出版

1977（昭和52）年11月20日初刷発行

底本の親本：「シロク口物語」国立書院

1948（昭和23）年10月

初出：「赤とんぼ」実業之日本社

1946（昭和21）年4月

入力：菅野朋子

校正：門田裕志

2012年1月31日作成

2012年12月19日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

椎の木

豊島与志雄

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>